

総説 アメリカ 文学史

大橋健三郎/斎藤 光/大橋吉之輔 編

研究社

総説アメリカ文学史

大橋 健三郎

斎 藤 光 編

大橋 吉之輔

東京 研 究 社 出 版



KENKYUSHA

〈検印省略〉

総説アメリカ文学史

1975 年 4 月 15 日 初版発行

1979 年 2 月 10 日 5 版発行

編 者 大橋健三郎 斎藤 光 大橋吉之輔

発 行 者 近藤 繁

発 行 所 研究社出版株式会社

東京都新宿区神楽坂 1 ノ 2 (〒162)

電 話 東 京 (03) 269-4521 (代)

印 刷 所 研究社印刷株式会社

Printed in Japan

3098-410098-1860

序

今日、一国の文学史を、包括的に、しかもある特定の一貫した観点から叙述することは、たいへん困難になってきている。文学の歴史そのものはまことにダイナミックで、それゆえ多大の魅力と深い意味を秘めているにもかかわらず、その包括的なものを何らかの観点から一貫して叙述するとなると、ほとんど常にその魅力と意味の大半が失われてしまいがちなのである。なぜそうなるのか。それは一つには、今日では、実証主義的であれ精神科学的であれ、かつてのような集約的な史観をとることが不可能になっているうえに、無数の個別的な細目と大きな歴史の流れとのダイナミックな、生きた関係を正しく包括的に捉える、新しい方法論ないし史観を見出すことが困難であり、ためにどんな一貫した叙述の試みからも、不可避免的に生きた何ものかが欠落していかざるをえないからであろう。

私たちは今ここに、新しく一冊の総説的なアメリカ文学史を編んだが、それを編むに際して、当然のことながらこの深い矛盾を避けることはできず、むしろそれを根本的な課題として常に引き受けなければならなかった。もとより本書は、新しい学説あるいは体系を打ち建てようとする文学史を意図したものでもなければ、また関連する学問諸分野の研究成果を導入する総合的なアメリカ文学史をもくろんだものでもない。むしろ、対象を文学そのものに絞ったうえに、今後に展開されてゆくであろう新しいアメリカ文学研究、ことに若い研究者あるいは学習者のそれに資すべき、基礎的な知識を提供しようとする試みにほかならないのである。だが、それでも、というよりそうした目的意識を明瞭にもてばもつほど、アメリカ文学史上における個別的な細目と歴史の流れとのダイナミックな関係を、基本的にどのように捉えるか、またその際に細目の選択と歴史の流れのなかの時代区分、および記述の方法を、どのような原則によってなすべきか、という問題は、いっそう明白に本書の根本課題とならざるをえなかったのだ。

この根本課題に対して、私たちは本書を編むに際して次のような原則と方法を選んだ。まず第一に、未成熟な方法論ないし史観を乱用することは、断然避けて、いっそう自然な叙述をなすべきである。たとえば、かつての *The*

Cambridge History of American Literature (1917-21) に対して、「それぞれの世代は、みずからの立脚点から過去を定義づけなければならぬがゆえに、それぞれ少なくとも一つの合衆国の文学史を生みださなければならない」¹という観点から編纂された、あの画期的な *Literary History of the United States* (1948) にしても、新しい方法論や史観に貫かれた文学史というよりは、むしろアメリカ文学の伝統を新しく真実に描きとろうとしたものにほかならなかった。² しかもその際、単独あるいは少数者の一貫した視点よりは、必然的に多数の寄稿者の参加による多層的な視点の糾合が要請されたのである。そして1948年という時点における、自国アメリカの文学伝統の新しい探求としてのこの画期的な文学史が、本国アメリカで重要な意味をもったばかりでなく、広く外国の、そしてわが国のアメリカ文学研究者に大きな衝迫を与えたことは、まだ私たちの記憶に新しいところなのだ。未成熟な方法論や史観よりは、いわば自国の文学の文化的アイデンティティを求めようという喫緊の要請と、それへの多層的な研究者の参加が、その意味と衝迫を生みだしたのである。

いうまでもなく、アメリカ文学は私たちにとって他国の文学にほかならず、しかも先にも述べたとおり、本書は大きな規模における総合的なアメリカ文学史を意図したものではなく、文学そのものを対象として基礎的な知識を提供しようとする企てなのである。単一あるいは少数者の視点ではなく、多層的な視点を糾合するという点では、規模と対象こそ違え、*Literary History of the United States* の場合と同様な方法を自然に取らざるをえなかったが、その他の点では当然ながら同書の目的と方法に直接倣うことはできない。むしろ私たちは、アメリカ文学の歴史を一つの他者として、相対的な関係においてそれを突き放して見つめ、かつ叙述し、もし私たち自身の自己本体(アイデンティティ)に関していうならば、そのように見つめられ、叙述されたものを、私たち自身の姿をそこばく照らし出すべき鏡のようなものとなすべきであろう。

そこで第二に、本書では、各時代の文学の状況をできるかぎり事実 に則して正確に記述し、しかもそうした記述のなかに、現在から見ての重要な問題点をおのずから浮かびあがらせるように心がけた。これはけっして事実の羅

1 Robert E. Spiller et al., eds., *Literary History of the United States*, 3 vols., New York, 1949, 'Preface', p. vii.

2 *Ibid.*, 'Address to the Reader' 参照。

列を意味せず、今日までの研究成果を踏まえたうえでの、事実の適切な整理解釈を意味している。各章の冒頭に、それぞれの時代の文学の全体像を簡潔に示し、次いでやや詳しい〔概観〕を付したのは、その整理解釈を鮮明にせんがためにほかならない。ただし、時代の変転は杓子定規の一律な記述の形式を許さないで、時代の特質に応じて〔概観〕の記述に若干の変化を与えた。植民地時代、および20世紀の両大戦間の時期の〔概観〕を特にジャンル別に記述したのは、その例である（その理由については、それぞれの箇所における説明を参照されたい）。

ところで、文学史における最も重要で、かつ困難な問題は、先にも触れたように、個別的な細目、特に個別的な作家、なかんずく作品そのものの解説説明と、それらを貫いている大きな歴史の流れの記述との関係をどのようにすべきか、ということであろう。大きな歴史の流れのなかにありながら、作家は一面個別的な存在であり、特に作品はそれ自体のある自足的な世界を、それぞれもっている。歴史の流れの叙述のなかにその個別性、自足性を解消してしまうことはできない。作品こそが文学の歴史を作りあげる肝心なものであるからには、むしろ作品の解説説明をこそ主軸とすべきなのだが、同時に他方、作品の解説説明を並列するだけでは、文学史は成立しない。ただ歴史の流れだけを記述する方法は非としても、何らかの形で文学史への試みはなされなければならないのである。

このジレンマに直面して、私たちは第三に、〔作家と作品〕という項を設けて、それに思いきって多くの紙数を与え、それと先の簡潔な全体像およびやや詳しい〔概観〕とを並列させるという方法を取った。このことによって、読者は、少なくとも代表的な作家に関しては、〔作家と作品〕の項において独立した作家研究、作品研究に接しうると同時に、いわばクロス・レファレンス式に全体像および〔概観〕を参照して、歴史の流れに常に眼を向けることができるであろう。もとより、この場合にも、事実を則した正確な記述と、その記述を通じての問題点の照明という原則を貫いているうえに、紙数の制限もあるので、十分な作家研究、作品研究とはなりえないが、それでも作家の伝記的事実を含めて、新しい研究の基盤となるべき本質的な問題は、十分に論じられているはずである。この〔作家と作品〕の項は、本書の著しい特色として編者の最も苦心したところであり、読者がたとえば本書を一種のレファレンス・ブックとして、任意に特定の作家と作品の問題点を参照できるという仕組みにもなっている（ただし、20世紀批評についてはその特質上、

〔作家と作品〕の代りに、〔重要批評作品解題〕を掲げ、特に、第二次大戦後今日にいたる現代文学については、その箇所でも明記したように、現代文学の流動性に鑑みて、動向と合わせて全体的に記述した。しかし後者の場合にも、その記述を重点的に行なうことによって、作家研究・作品研究としての性格をできるかぎり保つように努めた。

上の事柄と関連して当然問題になってくるのは、いわゆる時代区分のそれである。常に持続しているものを、記述の都合上時代別に分けることは、いわば文学史の常識となっているが、歴史の持続という点からいえば、その分け方はけっして機械的もしくは恣意的であってはならない。かくして私たちは第四に、アメリカ文学史の全体を、大きく植民地時代、18世紀末から南北戦争直前まで、同戦争から第一次世界大戦まで、两大戦間の時代、および戦後から現在までの五つの時代に分けるという点では、大体慣例的な方法に従ったが、この分け方もきわめて任意的であることを常に心しつつ、時代区分によってそれぞれの時代の大きな特質を浮かびあがらせると同時に、変転と持続の相を逸しないために、各時代の間の関連性を十分に捉えようと極力努力した。各章の表題に時代区分そのものを示す表示法とはらずに、「ピューリタニズムと啓蒙思潮」、「国民文学の創成と成熟」、「リアリズムと自然主義の文学」、「モダニズムと社会参加の文学」、「不条理の文学」といったふうに、それぞれの時代の文学の特質を要約する表示法をとって、「(「不条理の文学」の場合を除いて)それぞれを二つの節に分け、その〔概観〕で時代区分を明瞭にしたのもそのためであるが、また20世紀とともに文学のジャンルが多様化するにつれて、たとえば演劇と批評の項を新しくつけ加えると同時に、そこでそれらの前史についても述べるようにしたのも、一つの大きな歴史の流れが次第に拡大してゆく様相を、できるかぎり再現しようとしたためにほかならない。黒人作家、ユダヤ系作家の場合も、同様な苦心を払った。なお、20世紀の文学を記述するに対して、モダニズムに根ざす新詩もしくは新詩の精神が、広く他のジャンルにも大きくかかわっていることに着目して、詩人および詩作品にかなり大きなウェートを置いて改めて配列しなおしたことも、歴史の流れを捉える点での本書の大きな特徴といっていゝであらう。

思えば、戦後数多くのアメリカ文学史がわが国で出版されてきたにもかかわらず、今また本書を世に送るにいたったのには、それなりの切実な理由があった。一つには、戦後30年を経た今日、わが国におけるアメリカ文学研究

は、本国アメリカにおけるその目ざましい進展に相對して、きわめて高い水準に達しているにもかかわらず、そうした研究成果を集約する、若い研究者もしくは学習者のための総説的な一冊本のアメリカ文学史がまだあらわれていないということである。講座式の英米文学史やアメリカで出版された本の翻訳、あるいは独得な視点から書かれたアメリカ文学史はあるが、今日の研究成果を踏まえた包括的な形でのアメリカ文学史は、まだ世に出ていないように思われる。それにまた、大学の英文科で文学史を講ずるときのあの苦渋という、いっそう切実な問題もあった。包括的でしかも正確な基礎的知識を与えてくれる一冊のアメリカ文学史があれば、それを基盤として、文学史の講義そのものではさらに深く、かついっそう自由に講じることができるであろうし、また一般の研究者にも資するところが多大であろう。かくして私たち自身がみずからそうしたアメリカ文学史を編むことによって、そのような願いを自他のために実現しようと決心した次第なのである。

したがって、本書を編む原則と方法の第五として、それぞれの時代および作家について専門的に研究している人たちの協力が是非とも必要となった。まず編者たちが大体の計画を討議によってきめ、さらに五つの時代区分にそれぞれの責任者を依頼して、記述の細目と執筆者の選択および依頼の手はずを決めた。次いで全員が細かく全体の計画を検討吟味し、かつそれぞれのパートにおいて討論を重ねつつ、各々の執筆者が全体の計画との関連において独自にそれぞれの項目を執筆したのである。全体の調整には編者が当たり、それには全員の辛抱強い協力を得たが、それはあくまでも外形上のものであって、それぞれの執筆者の独自の見解と文体に及ぶものではない。次に執筆者の氏名と執筆分担を明記するが、たとえば第2章のように前半、後半と担当が単純に二分されている場合もあるとしても、担当がきわめて多岐にわたる章が多く、一々分担箇所を列挙すると煩雑になるので、各章の執筆者名だけを記すことにする。

執 筆 分 担

(アイウエオ順、敬称略、*印は章の責任者)

- | | |
|-----|---------------|
| 第1章 | ピューリタニズムと啓蒙思潮 |
| | 亀井 俊介 *斎藤 光 |
| 第2章 | 国民文学の創成と成熟 |
| | *酒本 雅之 島田 太郎 |

第3章	リアリズムと自然主義の文学		
	渥美 昭夫	*井上 謙治	渡辺 利雄
第4章	モダニズムと社会参加の文学		
	赤祖父哲二	*大橋健三郎	坂本 和男
	沢崎順之助	浜本 武雄	
第5章	不条理の文学		
	赤祖父哲二	*大橋吉之輔	邦高 忠二
	坂本 和男	沢崎順之助	浜本 武雄

なお、索引は斎藤が作成したが、別冊『資料編』に収録する年表は島田・渡辺が、文学地図は大橋(吉)が作成に当たり、参考文献の整理は山本品が行なったことを付記しておく。

ふりかえてみれば、本書の企画が始まって以来はや3年余の歳月が流れてしまった。今本書を世に送るのは、編者および執筆担当者の大きな喜びであるが、それぞれの章の責任者、執筆担当者、および特に協力を願った山本品氏の辛抱強い、そして暖かい協力がなかったら、本書はついにこのような形で世に出ることはなかったであろう。ここに、これらの方々に深甚の感謝の意を表明するものである。

1974 年 12 月 25 日

大橋 健三郎
斎 藤 光
大橋 吉之輔

目 次

序	i
I. ピューリタニズムと啓蒙思潮	
1. 植民地初期から 1730 年まで	
概 観	3
作家と作品	
WILLIAM BRADFORD	10
JOHN WINTHROP	11
ANNE BRADSTREET	12
MICHAEL WIGGLESWORTH	14
EDWARD TAYLOR	15
SAMUEL SEWALL	18
COTTON MATHER	19
2. 1730 年から独立革命期まで	
概 観	22
作家と作品	
JONATHAN EDWARDS	29
BENJAMIN FRANKLIN	32
JOHN WOOLMAN	37
ST. JEAN DE CRÈVECŒUR	38
PHILIP FRENEAU	39
CONNECTICUT WITS	41
ROYALL TYLER	43
II. 国民文学の創成と成熟	
1. 独立革命期から 1820 年代まで	
概 観	47

作家と作品

WASHINGTON IRVING と KNICKERBOCKER GROUP . . .	53
CHARLES BROCKDEN BROWN	57
JAMES FENIMORE COOPER	60
WILLIAM CULLEN BRYANT	66
EDGAR ALLAN POE	70
WILLIAM GILMORE SIMMS と南部の作家たち	77
その他の作家たち	82

2. 1830 年代から南北戦争前夜まで

概 観	83
---------------	----

作家と作品

RALPH WALDO EMERSON	87
WALT WHITMAN	95
HENRY DAVID THOREAU	104
HERMAN MELVILLE	111
NATHANIEL HAWTHORNE	121
GENTEEL WRITERS—LONGFELLOW, HOLMES, LOWELL . .	132
EMILY DICKINSON	134
その他の作家たち	138

III. リアリズムと自然主義の文学

1. 1860 年代から 1880 年代まで

概 観	143
---------------	-----

作家と作品

南北戦争期の作家・詩人——LANIER, DE FOREST	150
MARK TWAIN	152
WILLIAM DEAN HOWELLS	164
HENRY JAMES	175
「地方色」の作家	185
i. New England——JEWETT, FREEMAN	186
ii. 南部——HARRIS, CABLE, PAGE など	188
iii. 西部・中西部——HARTE, EGGLESTON など	190

その他の作家——BELLAMY, O. HENRY	193
2. 1890 年代から 1910 年代まで	
概観	195
作家と作品	
HENRY ADAMS	201
HAMLIN GARLAND	206
STEPHEN CRANE	209
FRANK NORRIS	213
THEODORE DREISER	217
その他の自然主義作家——FREDERIC, LONDON	224
世紀末の作家——BIERCE, HEARN	225
MUCKRAKERS	227
EDITH WHARTON	229
WILLA CATHER	232
ELLEN GLASGOW	236
SHERWOOD ANDERSON	239
SINCLAIR LEWIS	245

IV. モダニズムと社会参加の文学

1. 1920 年代

概観	251
作家と作品	
〔詩人〕	
シカゴ・グループ——MASTERS, LINDSAY, SANDBURG	265
ROBERT FROST	267
WALLACE STEVENS	269
EZRA POUND	271
イマジスト——H. D., AMY LOWELL など	274
WILLIAM CARLOS WILLIAMS	276
T. S. ELIOT	279
MARIANNE MOORE と E. E. CUMMINGS	281

[小説家]

GERTRUDE STEIN	283
F. SCOTT FITZGERALD	286
ERNEST HEMINGWAY	293
JOHN DOS PASSOS	302
ユーモリストたち——LARDNER, THURBER など	309
THORNTON WILDER, その他	311
黒人文学と「ニグロ・ルネッサンス」	314

[劇作家]

EUGENE O'NEILL	317
ELMER RICE, MAXWELL ANDERSON, その他	322

2. 1930 年代

概 観	327
---------------	-----

作家と作品

[詩 人]

W. H. AUDEN	338
HART CRANE	340
FUGITIVES——RANSOM, TATE, WARREN	342

[小説家]

WILLIAM FAULKNER	345
THOMAS WOLFE	356
JOHN STEINBECK	362
地域の作家たち——CALDWELL, SAROYAN など	370

プロレタリア作家、および

JAMES T. FARRELL, NELSON ALGREN	372
NATHANAEL WEST, その他	374
RICHARD WRIGHT	376
HENRY MILLER	379

[劇作家]

CLIFFORD ODETS, SIDNEY KINGSLEY, その他	383
--	-----

[批 評]——重要批評文献解題 (1910 年代~1930 年代)	386
---	-----

V. 不条理の文学

概観	391
作家と作品	
詩	394
小説	
南部作家	408
ユダヤ系作家	415
黒人作家	430
その他の作家	443
演劇	453
批評	462
重要批評作品解題 (1940年代~1970年代)	476
INDEX	477

I

ピューリタニズムと啓蒙思潮



アメリカに植民が始まったのは、南部では Virginia の Jamestown に 1607 年、北部では Plymouth と Boston 地方にそれぞれ 1620 年と 1630 年のことであった。この章では、植民地時代の初期から独立革命期の 1790 年頃までの、2 世紀たらずのあいだにアメリカ人が書いた文学をとりあげる。アメリカ人といっても、アメリカ永住の目的で大西洋を越えてきた者たちという程度の意味であり、文学といっても純文学と称しうるものはきわめて少ない。

17 世紀には Boston を中心として New England にピューリタン文化が栄えた。「聖書に基づく国家」を意図したピューリタン文化は、その担い手が役人と牧師であり、主として彼らの残した文章が当時の広義の文学となったのであるから、歴史であれ、伝記であれ、日記であれ、宗教的色彩がきわめて濃厚であった。しかしその宗教的信念から生まれた彼らの文体の特色は力強い平明体であり、宗教的比喩やイメージが彼らの文章に詩的な趣きを与えることも少なくなかった。18 世紀になると、Philadelphia や New York などの文化都市もおこり、また人間理性を尊ぶ啓蒙思潮が、17 世紀から受けつがれた宗教的な世界観を次第に浸蝕するようになって、信仰の時代から徐々に理性の時代へと推移していった。それにともない、文体もこれまでのどちらかという重い平明体から、軽い明快なものに変化した。

そしてとくに独立前後の 30 年間は政治の時代であり、文芸の創作は量的には 17 世紀よりはるかに多くなったが、政治家の活躍に匹敵する仕事をした文学者はいなかった。文芸の花が美しく咲くには、長い準備の時代が必要であったのだ。

17 世紀から 18 世紀にいたるアメリカ文学は、この準備期の文学であり、それ自体としてすぐれた作品もわずかながらあったとしても、むしろ 19 世紀における開花を用意した土壌として、また発芽から蕾をもつにいたる過程として興味深いのである。



1. 植民地初期から 1730 年まで

概 観

アメリカに正式に植民が始まる以前から、アメリカの土を踏んだ者たちによる報告書が書かれ、その大部分はアメリカの自然の美しさと肥沃なことを強調し、アメリカをエデンの園になぞらえた。もし先住民であるアメリカン・インディアンが残した文学を除外すれば、アメリカ文学史はこういう報告書から始まることになる。しかもアメリカのイメージとして最も支配的なものになったエデンとしてのアメリカ像をつくりあげる端緒となった点で、これらの報告書は、文学史的にも注目に価するといえよう。

南部 Virginia の植民が、New England の植民より一歩さきに始まったとはいえ、17 世紀のアメリカ文化は Boston が中心であったので、文学もピューリタニズムから生まれたものが中心となった。Mayflower 号で Plymouth に上陸した William Bradford たちはピルグリム・ファーザーズ (Pilgrim Fathers) と称されるが、宗教的にはイギリス国教会から分かれた分離派 (separatist) と称する 100 名ほどの一団であった。Boston に上陸して Massachusetts Bay 植民地をおこした John Winthrop たちは、イギリス国教会のなかにとどまり、これを “purify”¹ しようとした 1000 名ほどの一団で、彼らが正統的なピューリタンであるが、分離派たちも広義にはピューリタンと称される。Winthrop らが「聖書に基づく国家」(Bible Commonwealth) を建設しようとして神政政治 (theocracy) という政教一致の方式をとったのは、彼らの教会 (神学的にはカルヴァン主義、教派的には会衆派 [Congregationalism]、この点では Bradford たちも同じであった) を一種の国教にしようとしたためで、イギリス国教会と同じに自分たちの信条に反対する者を追放してしまった。初代の優秀な指導者たち (役人と牧師) が神政政治の体制樹立に成功したので、ピューリタニズムは社会のすみずみにまで浸透し、キリスト教史上特筆に価する強固な宗教的社会が生まれた。

1 “Puritan” という言葉はこの意味から生じた。